

口承文芸の「管理者」という概念について

金井清光

一 口承文芸の担い手

口承文芸としての伝説・説話・物語や歌謡などは口から口へと語りつがれ語りひろめられ、あるいは歌いつがれ歌いひろめられることによって、時間的に長期間伝承され、地域的に広範囲に拡散される。その場合「口から口へ」というけれども、ただ漫然と口から口へうけつがれてゆくものではけつてない。ある人がある説話なり物語なりを語つたとき、それを聞いた人が別の場において語り手に変身するには、それ相当の条件が必要である。つまり、聞いた人がただ聞いただけで終るのではなく、それを再生産して別の場で別の人に語つて聞かせるのには、最初に聞いたとき受けた感銘なり印象なりを他人に語り聞かせて与えることによって何らかの利益が得られる場合に限る。他人に語つても何の利益もないことがはじめからわかつていれば語ろうと思わないし、語る必要もない。

一つの主義主張や信仰をもつ人が、その主義主張や信仰を宣伝するのに都合のよい説話や物語を熱心に語るのには、熱心に語ることに

よつて自分の仲間をふやそうとするからである。それを聞いて深い感銘を受け、仲間にはいった人は、次の段階で新しい仲間を獲得するため聞き手から語り手に変身する。こうして口から口へと説話や物語が語りつがれ、ひろまってゆく。つまり口承文芸は主義主張なり信仰なり、あるいは日常生活で何らかの共通の利害をもつ集団によつて語りひろめられ、語りつがれてゆく。そのような集団は口承文芸の担い手ということもできよう。

文学を研究するにあつて文献や書籍に記載されている作品を研究対象とするのは当然であるが、それだけで満足することなく、文献や書籍に記載されていない口承文芸にまで視野を拡大するとき、口承文芸を担っている集団の解明が重要な研究テーマになる。ちょうど書承文芸の研究において書承の機能を担う文献や書籍を研究する文献学や書誌学がきわめて重要な役割を分担するように、口承文芸の研究においては口承の機能を果たす集団の担い手がきわめて重要な研究対象となる。

こういつたことを最初に主張し実践したのは柳田国男氏であつて、「聖と云ふ部落」(『郷土研究』大正三年八月号)、「俗聖沿革史」(『中央公教』(五卷)一五)

号大正十年一月至五月。(定)の二論文において阿弥陀聖・勸進聖・回国聖・遊行聖・高野聖・三昧聖・鉦打ちなどをとりあげ、阿弥陀仏の名号を唱えて勸進をおこなう宗教者集団が口承文芸や芸能などの伝播拡散のほか、さまざまな世俗の活動をおこなったことを幅広い視野をもって説かれた。つづく『女性と民間伝承』(昭和七年十二月刊『定』では中世の寺が何阿弥と名のる半僧半俗の徒をかかえる話の間屋であつたことを指摘し、京の誓願寺に和泉式部など女性の話が多いのは誓願寺関係の比丘尼がそれを語つたことを説き、また「有王と俊寛僧都」(『文学』昭和十五年一月号)では俊寛と有王の物語が高野の蓮華谷聖や、死霊の執着を語り歩く有王という名の法師や、肥前黒髪山の熊野権現を背景とする梅野座頭などによって語りひろめられたことを明らかにされている。特に『女性と民間伝承』の中の「文芸の主、管、者」という項では「芸術はもと女の主、管、であつて」と言い、「信仰の保、管、者」として男子の社会を指導し得た時代の女の感覚の鋭さ」と述べているが、ここに使用されている「主管者」「主管」「保管者」という語が、やがて「管理者」「管理」という語を学界に通用させるものになつたと考えられる。『定本柳田国男集』別巻五の索引によれば柳田氏は「管理」という語を一回だけ使用している。それは昭和十五年九月刊岩波新書『伝説』(『定本柳田国男集』第五卷)において、「独り文字の恩恵に与かり得なかつた草莽の民のみが、なほ久しい間以前の状態に止まつて居た為に、彼等が管理する伝説の中にも、同じく若干の歴史が含まれて居なければならぬといふ、類推が下され得たのみである」というのである。これは昭和十三年日本民俗学講座第五期の講義原稿をまとめたものというから、すでに昭和十三年には

「管理」という語を使用されていたのかも知れない。

柳田国男氏の民俗学の発想を国文学に活用した折口信夫氏は「小栗外伝」(『民族』二卷二号、大正十五年十)と題する論文において、説経節「小栗判官」に代表される小栗譚は下級の念仏衆に餓鬼衆とか餓鬼阿弥などといわれる人びとがいて、自分の身の上を懺悔念仏して語り歩いたことから生まれたのではないかと推定された。つづく「日本文学の唱導的発生」(『日本文学講座』第一卷総論、昭和二)では熊野念仏の徒が『義経記』や『曾我物語』を語りひろめたことを説き、「八島語りの研究」(『多磨』昭和十四年二月号)では八島合戦譚や加賀篠原の実盛譚などは、それを伝え歩く遊行神人や聖らによって有名になつたことを指摘されている。特に「日本文学の唱導的発生」では「叙事詩及び若干のまだ呪力の信ぜられた呪言を綜合して、可なりの体系をなした物の伝承諷誦を主とする職業団体を語部と呼んでよい」と述べて、柳田国男氏のいわれる主管者・保管者を語部と呼んでおられる。

同じく民俗学の発想を仏教文学の研究に活用した筑土鈴寛氏は「かるかや考」(『国語と国文学』昭和四年十一月号、『中世文芸文の研究』再録)において菟萱石童丸の物語に高野聖や時衆が関与していることを説き、「經流文学と教団の物語」(『国語と国文学』昭和六年十月号、『中世文芸文の研究』)では和泉式部伝説が各地に伝わっているのは遊行の女性宗教家が各地に語り伝えたからであり、時衆はそのような女性宗教家の歌比丘尼と関係があり、京都の誓願寺がかれらの足だまりであつたことを説かれた。そしてさらに『宗教文学』(昭和十三年九月刊)では怨霊供養としての実盛供養や、熊野本地、小栗譚などに時衆が関与していることを述べ、「鎮魂と仏教」(『大正大学学報』昭和十

五年三月。【中】でも死者蘇生を説く熊野信仰と時衆とは密接な関係が世芸文の研究」あり、謡曲「誓願寺」「実盛」や実盛虫送りなどいずれも時衆が関与していることを説かれた。また『復古と叙事詩』(昭和十七年十二月刊)では高野聖や京都東山の安養寺・双林寺・長楽寺などの念仏聖と『平家物語』との関係、『大塔物語』の頓阿や古山珠阿など時宗聖について述べ、「歴史と伝説―曾我物語成立考―」(十一月号『国文学』昭和十八年)では『曾我物語』の成立と時衆との関係を指摘されている。

高崎正秀氏「唱導文芸の発生と巫祝の生活」(二)(三)【国学院雑誌】昭和七年五月六月号も高野山の萱堂聖が石童丸の話を語り出したことを指摘しておられる。

柳田・折口・筑土・高崎ら各氏はいずれも大正初年から昭和十年代にかけて口承文芸の研究にすぐれた業績を残した先達であるが、右に挙げた口承文芸の担い手に関するおもな論考を一読してみると、文献や記録を絶対視する文献学や書誌学とは異質の着眼と発想によってこの問題がとりあげられ、明らかにされて来たと言える。文献に記載されている記録や文学は、文献的事実や文学を伝えるだけである。にもかかわらず、それをもって歴史的真実や人間のほんとうの心を伝えるものと誤解し、錯覚していたところに、従来の歴史学や国文学の犯した大きな誤りがある。民俗学はそうした反省の上に立って、文献に記されていない、あるいは文献の背後にある生きた人間の生活を探求しようとする。それは中央の文献と無縁ないし縁の薄い地方の習俗や、下層庶民または社会の表面に出ない女性の日常生活を最重視する研究態度をとる。ところで従来の歴史学や国文学は一遍の創始した時衆集団を研究対象にとりあげることとはな

った。時衆集団は中央の政治権力とは無縁の遊行集団であり、下層庶民や女性と最も縁の深い民衆仏教集団である。したがって文献中心の歴史学や国文学の研究対象としてとりあげられるよりも、むしろ民俗学畑の国文学研究者により口承文芸の担い手として注目される資格と条件を具えている。

二 學術用語としての「管理者」

柳田・折口・筑土・高崎の各氏らによって開拓された口承文芸の担い手に関する研究を、語り物の「管理者」という概念で統一して把握し、その機能と役割をいっそうはっきりさせたのは角川源義氏である。角川氏は「悲劇文学の発生―説話の管理者に対する一考察―」(『国文学論究』十二号、昭和十五年六月)において、猿轡入話に代表される笑い話が悲劇文学でもあるが、悲劇の説話を管理する語部(話者)は自分の、あるいは自分の祖先の悲劇の主人公としての敗北の歴史を語りねばならなかったことを説き、また海部や山守部の民がいろんな説話を管理していたこと、貴種流離譚は海部の民が管理していたこと、本三位中将重衡や小松三位中将維盛の流離譚は熊野信仰を支持する語りの徒が管理していたこと、説話の管理者が自分自身の不遇を語り懺悔することにより悲劇文学は懺悔文学へと変わってゆくことを説いている。角川氏はこの論文において「管理」という語を一回、「管理者」という語を六回使用し、さらに「管理する」という動詞を二十二回使用しているが、「管理」の意味については何の説明もない。しかし「説話を管理してゐた一群の人達は凡語部なる名称によつて

表はされるだらう」と述べているから、説話管理者をほぼ語部と同義語と考えていたことがわかる。角川氏はこの論文のほかに「文芸と趣向の問題」「高野聖」「和邇部の伝承」の三編をあわせて昭和七年五月に『悲劇文学の発生』を刊行された。B6判二一六ページの小型の本であるが、本書全体を通じて「管理」を四回、「管理者」を十五回、「管理する」を四十九回使用している。

つづいて角川氏は「倫理の発生―隱者の生活と文学―」(『国語と国文学』昭和十八年六月号)を発表して高野聖が『三人法師』などの発心由来譚懺悔物語を管理しており、また京都東山の双林寺、四条道場金蓮寺、誓願寺、青蓮院などと邇世者との関係を述べて、そこに行われた文学や芸能について説明している。さらに角川氏は「語り物と管理者」(『国語と国文学』昭和十八年十一月号)という論文を発表して中世の語り物と管理者について大所高所からきわめて広範囲に考察された。まことに広大な視野をもつ論考で、要点を抽出するだけでも容易ではないが、大意を要約してみるとまず熊野を拠り所とする時衆が東海道池田宿の熊野を中心とする重衡卿流離譚を管理していたことを指摘し、東国に進出した安居院が箱根・伊豆山を中心とする語りの徒に關係があり、熊野信仰につらなる鬼界島の俊寛・康頼説話は京都東山双林寺が管理していたが、このように語り物の管理は熊野から叡山の語りの徒へ、山門の安居院から浄土僧へと移っていったことを説く。次に善光寺の時衆が『地藏菩薩靈驗記』の曾我怨靈譚や『大塔物語』などを管理しており、善光寺は語り物に限らずその他の芸能などでも重い位置にあったこと、また板鼻間名寺の時衆が『義経記』や『曾我物語』や謡曲「鉢木」の一部分の話を管理しており、天王寺などもやはり語

り物を管理していた寺院であったことを述べる。そして『曾我物語』の成立を本質的に規定している怨靈供養ということが時衆の宗教活動の中心であることを各種の御霊信仰などの民俗行事を引用して説き、さらに時衆が怨靈供養から一步進んで霊の復活譚まで管理していたことを小栗譚によって説明する。この論文は昭和五十年十月刊の角川氏の遺著『語り物文芸の発生』に再録されているが、「管理」が四回、「管理者」が十回、「管理する」が十八回使用されている。

角川氏は「管理」の意味を説明されていないが、右の著書や論文の内容から推察するに、語り物や芸能などをすこしずつ改めながら地域的に伝播し、時間的に伝承する集団を管理者といい、そうすることを管理ないし管理すると言っていると認められる。もともと管理は漢語であり、「管」はつかさどる、とりしまる、の意。「理」はおさめる、の意である。「管理」と熟すると諸橋轅次氏『大漢和辞典』に、つかさどりおさめる、管轄弁理する、事務を総轄して処理する、支配、取締、などの意が挙げてある。現在でもたとえばマンション管理人という、マンションに関するあらゆることを引き受けて、そのマンションを現在および将来にわたって望ましい状態に維持保全する役目を果たす専門家のことである。同様にして語り物の管理者という、その語り物文芸がとだえないように伝承する任務をもち、できるだけ大ぜいの人びとに聞かせるため伝播する役割を引き受け、さらにその語り物を文芸としていっそう望ましい状態に改良する仕事もおこなう人びとのことをいう。要するに管理者とは伝承・伝播・改良の三つを実行する集団である。

こうして語り物文芸の研究に管理ないし管理者という概念が導入

され、以後、この語は文化の担い手としての民衆に関心をもち民俗学を理解する国文学研究者に受け入れられて、学術用語として定着化していった。かく申す私自身も、この語のもつ深い意味内容と何ともいえない味のある感触に共鳴したひとりであり、これまで論文の中でときどき管理とか管理者とかいう語を使用して来た。ところが上層権力者にばかり目を向けて社会の底辺の民衆に無関心なため民俗学を理解しない人たちの中には、上層階級の書いた文献のみを尊重する研究態度をとり、したがって管理・管理者という語を毛嫌いする傾向がある。国文学研究資料館編『国文学年鑑』昭和五十七年版（昭和五十九年刊）「学界展望」「中世文学」に、

学界には研究方法といった根本的な問題の外にも、言葉や造語にも流行るものがある。説話関係の論文によくみえる説話、管理者、などというのも妙な設定語である。また最近の論文には磁場という言葉が目につく。こういう一種の流行り言葉やタイトルを使用することで、学界の最先端を行くとも錯覚しているのだろうか。その表現や造語が真に適切なものであるかどうかを深く検討することもなく、安々とそれに乗ずるのは考えものである。

という文章が掲載されている。ここには二つの大きな誤解がある。その一は説話管理者という語を妙な設定語と批判し、また一種の流行語とみていることである。この語はけっして妙な設定語でもなければ、最近数年間の流行語でもない。角川源義氏の「悲劇文学の発生―説話の管理者に対する―考察―」は昭和十五年に発表された論文であり、管理者という語が学界に登場してからすでに四十五年の歳月

が流れている。その間多くの研究者に検討されて使用されて来たこの語を、磁場といった最近の造語ないし流行語と一緒に扱うのは誤りである。

その二は「表現や造語が真に適切なものであるかどうかを深く検討することもなく、安々とそれに乗ずるのは考えものである」という言い方である。たしかに真に適切かどうか深く検討することもなく安々と乗ずるのは考えものであるが、すくなくとも私は管理ないし管理者という語を深く検討し、口承文芸や芸能の伝承・伝播・改良を意味する抽象語としてこれ以上適切な語はないとの確信のもとに使用している。学問は個々の事実を数多く具体的に実証するとともに、それらの事実を大所高所から総合的に把握するための抽象概念を創出する必要がある。その必要をみたす語が管理ないし管理者という学術語である。もしこの語を否定するならば、これに代わるべき別の学術語を提示していただきたいと思う。

（かない・きよみつ／清泉女子大学）